

飯島賢二の 『恐縮ですが...一言コラム』

第 427 回 ハルモニア経営 ~ 指揮者はスコアを縦に読む

2011.7.10

イケケン先生、大昔、大学オーケストラの指揮者をしていた。
あまり感心すべきレベルのオケではなかったが、わざわざ白百合女子大の大学祭に乗り込んで、映画音楽などのポピュラーコンサートなどをやっていた。小澤征爾並の長髪で、今より 20kg 近くもスリムだった紅顔の美少年、さぞかしカッコ良かったに違いない...誰からも言われた覚えがないので、単なる自画自賛の臆想である。

オーケストラ音楽の専門用語に「スコア」と言うものがある。点数表とは違う。日本語で「総譜」と呼び、指揮者が読む楽譜のことである。指揮台の前に指揮者用の譜面台があり、分厚い図書がのっている光景を見るが、そう、あの、重そうな図書が「スコア」である。スコアには楽器群ごとの楽譜がすべて書かれている。木管楽器のピッコロ、フルートから始まり、管楽器、パーカッション、弦楽器と、音楽が進行する順に一覧で分かるような譜面である。歌のソロ、合唱などが加わる大曲では、1 ページに 30 段ぐらいのパート譜が、ところ狭(せま)しと並んでいる。

例えばトランペットの第 1 奏者は、自分が吹く部分だけの譜面を見て演奏している。フルートもクラリネットも、各パートすべてが同じで、この譜面を「パート譜」と読んでいる。パート譜は、トランペットという音楽上の役割担当者への指令書といっていいかもしれない。「この指示通り、あなたは役割を果たすべし」というミッションである。各パートのミッションを、すべて網羅し一目で分かるようにまとめたのが「スコア」である。

ソロ以外の音楽は一人で作るものではなく、共同作業、つまりハルモニア(調和)が原点である。パート譜だけでは、隣にいる人が何をやっているのか分からない。ボリューム(規模や量)もこれでいいのか判断できない。テンポ(スピード)は適正か、アインザッツ(奏し始めの瞬間)のタイミングや、グリッサンドやポルタメント等の表現、表情付けが分からない。パート譜だけでは、全く音楽なりえないのである。どんな音楽にするのか、明確な哲学と確信をもって、役割分担を担うパートナー達に正しく伝え、時間枠に沿って、全体のバランスと協調を図りつつ、目指すべき音楽づくりを詳細な指示のもと実践させる統括者が、つまり指揮者である。その指揮者の、唯一無二のバイブルが「スコア」であるといえるだろう。

これは全く経営者と同じ役割といえるのである。そして指揮者はスコアを縦に読む。30 段ものパート譜を瞬時に縦に読む。それは曲全体の構成を常に把握する必要があるからといえる。メロディに流され、横に音符を追っていても、全体の在り方を見失ってしまい音楽は創れない。今の経営者に足りないのは、この点にあるかもしれない。目先の利益に惑わされ、あるいは役割機能のバランスを履き違え、本末転倒に陥ってしまう例が後を絶たない。指揮者を手本に、今こそ「ハルモニア経営」、考えてみたいものである。